

挑戦しがいのある「将来の大国」

——ブラジルで働く

もしもブラジル赴任を命じられたら。ビジネスにおける選択肢・候補としてのブラジルは。

YKK ブラジル 柴田光政

アフターコロナとなって久しく、日本企業が再び海外展開を目指しアジア圏内を重視する中で、今回あえてブラジルへ注目いただきたく筆をとる。この記事を読んだ後、①国、②人、③事業環境、について読者の中に何か残れば幸いである。

多種多様な人種と経済格差

正式名称はブラジル連邦共和国、南米大陸で最大の人口(2.1億人)、面積(851万平方キロメートル、日本の22.5倍)、経済規模(7.4兆リアル、約1.6兆ドル)を誇るカトリック国にして、米州唯一のポルトガル語圏の国家である。ドイツやイタリアのみならず東欧も含む欧州系(約50%)、植民地時代や奴隷制廃止にルーツをもつアフリカ系・中東系・東洋系(約10%)、そしてこれらの混血系と先住民(約40%)と、多種多様な人種で構成される。

「陽気で明るい国」というイメージが先行しやすいが、「多種多様な人種」には、植民地時代から連綿と続く経済格差という社会面の特徴が潜む。ルーツを欧州にもつ少数派の金持ちと、それ以外の人種が多く所属する低所得層に分かれ、



隣国アルゼンチンも股にかけ、世界三大瀑布のイグアスの滝

格差を縮めるのは容易ではないと考えられている。こうした経済格差を背景に、ポピュリズム型の左派政権が生まれ、低所得者向けにいわゆる「パラマキ」を行いがちなのがブラジルの政経面における特徴だ。他方、国の輸出品目は鉄鉱石や原油、農畜産物といった一次産品がメインで

ある。国際相場に左右されるので、国の経常赤字は膨らみやすい。パラマキによる財政赤字と、一次産品依存による経常赤字は、通貨安やインフレといったかたちで企業を直撃する。

ブラジルは1990年代に2000%を超えるハイパーインフレを経験した。「レストランに入る時と出る時で値段が違った」。今でも語り継がれる当時のジョークだ。ゆえに、ブラジル人は可処分所得の大部分を、リスクヘッジのため自動車や貴金属といった現物の消費に回すと言われている。こういった消費者行動だけではなく、商

習慣(例:「36回払い・無金利」といった販促広告)や企業人事労務(例:毎年1度の給与調整、月給支払い2



リオデジャネイロのキリスト像
観光資源も多く帯同家族も貴重な経験が得られる



生の野菜や果物が美味しく食べられる数少ない国